

木蔭の学生

黄 當 時

佛教大学はキャンパスの小さな大学であるが、緑が美しいと思う。中庭を通りかかるとよく学生が三々五々談笑したり、本を紐解いているのを見かけるが、数年前に勤務していた北京大学も広大なキャンパスに緑が映えてそれは美しかった。

北京は冬がかなり寒い。気温は零下二十度位まで下がり、毛糸のバッチを必需品と教えられて着用していても、膝関節が炎症を患う程であった。木々は全て落葉して丸坊主となり、針葉樹もその存在が薄れてほとんど目立たないし、木という印象がない。それが四月中旬頃に暖かくなるや、一・二週間であらゆる樹木があつと言う間に新緑に覆われてしまう。春を通り過ぎて初夏にはいる、と言っても良い位だ。その変化の速度は、暗い灰色に慣らされた者の目を見張らせる。若葉の美しさ・自然の大きさに感慨一入であったのをよく覚えてゐる。学生たちも冬籠りから解放さ

れて表情が明るい。そして徐々に木蔭で学習する姿が増えてくる。

中国では若者のうち千人に一人しか大学に進学できないので、大学生はブライドが高いし、エリート意識も強いと言われているが、一般によく勉強する。ついでに言えば、日本の大学生は全体としてはあまり勉強しないと言えるが、する学生はするし、しない学生につられるということがある。対するに、中国の学生は、相対評価が存在することや大学にはいれば職が手にはいったのも同じというシステムのせいか、お勉強、皆でさぼれば恐くない、という一面も持っていたようである。

北京大学は中国の圧倒的多数の大学と同じ様に全寮制である。学生は早朝も放課後もキャンパス内にいるのだが、部屋は多い時には八名か十名で一つだし、机も何人かで一つを使うという環境から、図書館はいつも盛況を呈し、特に外国語などは効果を上げる為には声を出して練習する必要がある、外に出て勉強する人も多いのである。寒さに中断していた風景が木々の緑の甦りと共に戻ってくる訳である。

外に在る動機・意味が違ふのであろうが、あらゆる環境を積極的に利用して勉強する心

がけは大切にしたい。私は木蔭で書に親しんでいる学生を見るのが好きである。

(こう とうじ 文学部専任講師)

